様式 C-19

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 15 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０２４３０３３
研究課題名　発達障害が疑われる非行少年の包括的再犯防止対策
研究課題名　Repeat offender prevention program for delinquent juvenile with developmental disorders
研究代表者
田中　康雄　（TANAKA YASUO）
北海道大学・大学院教育学研究院・教授
研究者番号：２０１７１８03

研究成果の概要（和文）：
児童自立支援施設と退所後に復帰する地域を対象とした研究で，2008 年は７つの児童自立支援施設と３つの自立援助ホーム職員に聞き取り調査を行い，職員の子どもへの育ちの視点を聞き取りした。
2009 年は，全施設へのアンケート調査内容を吟味し実施した。
2010 年は，さらに施設への聞き取りを深めるとともに，関西）と関東の２カ所でフォーラムを開催した。
2011 年はこれまでの聞き取り調査とアンケート調査をもとに，児童自立支援施設で生活するという意味について研究者で充分に議論をし，最終報告書を作成した。

研究成果の概要（英文）：
This study is a thing for the child independence support institution.
In 2008, we interviewed seven child independence support institutions and three independence help home staff s. Particularly, we interviewed it about the point that a staff of institution thought of about the breeding to children.
In 2009, we conducted questionary survey in all institutions.
In 2010, we held a forum as the report society based on the results in two places.
In 2011, it is the last year of this study. Based on past hearing investigation and questionary survey, we thought about the significance that children lived in the child independence support institution.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	14900000	4500000	19370000
2009 年度	7200000	2160000	9360000
2010 年度	7100000	2130000	9230000
2011 年度	8400000	2520000	10920000
年度			
総　計	37600000	11310000	48880000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：
(1)児童自立支援施設(2) 発達障害(3)自立援助ホーム (4)非行　(5)生活　（６）再犯防止

１．研究開始当初の背景

田中（研究代表者）は，いじめ，虐待，発達障害ゆえの生活の躓きなどの「被害相」に居た子どもたちが，「加害相」に移行して，非行や虞犯少年と認識される「被害と加害の円環」にある状況に遭遇してきた経験から，少年非行を予防するには，子どもたちの「学びなおしと育ちなおり」が本来求められるべきであると捉えてきた。

そのなかで，田中，村瀬（共同研究者）らは，2007 年前後 3 年間にわたり児童自立支援施設への定期的訪問を続けてきた。この施設は不良行為をなし，又はなすおそれがある児童及び家庭環境その他の環境上の理由により生活指導等を要する子どもの生活指導・学習指導及び職業指導を行うところである。近年は，発達障害のある子どもたちや被虐待体験のある子どもたちが多数入所しており（厚労省 2006）その対応を巡り，施設自体が疲弊していた。われわれの参与観察でも，職員は子どもたちの毎日の生活を支えることに精一杯で，計画的かつ一定の成果を示すような生活モデル，あるいは心理教育プログラムを構築する余裕が認めることができなかった。

２．研究の目的

本研究は、児童自立支援施設と退所後に復帰する地域を対象とし、①施設に暮らす子どものアセスメント　②施設機能の検証③再非行防止のための心理教育プログラムの開発と効果測定　④地域社会での自立を保障する地域環境作りの４段階の研究開発することで、発達障害が疑われる子どもたちへの包括的な再犯防止対策を構築することを到達点とし、A.児童自立支援施設　子ども調査，B.児童自立支援施設　職員調査，C.心理教育プログラム検討，D.地域環境調査・整備の４つの研究から構成した。

３．研究の方法

協力要請した施設を訪問し，直接施設職員からの聞き取り調査とアンケート調査を実施した。

４．研究成果

（１）調査は，人権重視の立場から子ども調査のまえに，職員対象の調査を実施した。

2008 年は，北海道立大沼学園，北海道立向陽学園，北海道家庭学校，国立武蔵野学院，国立きぬ川学院，大阪府立修徳学院，大阪市立阿武山学園の７つの児童自立支援施設と，ふくろうの家（函館市），東樹園（京都市），そらまめ（大阪市），の３つの自立援助ホーム職員に聞き取り調査を行い，職員の子どもへの育ちの視点を聞き取ることができた。そこには，職員個々に培ってきた子ども観や人生哲学とも呼べる理念が存在していた。また施設として，業務量の増加や労働条件の改善点，組織観や職員の家族観，教育観の変貌など多岐にわたる問題点も確認できた。さらに，自立援助ホームの実践を聞き取る中では，児童自立支援施設を出院したあと地域社会で生きることの困難さは予測できたが，改めてそばにいる大人が理解と励ましを与え続けることで，たくましく社会で生活する者，あるいは家庭をもとうと努力する者が生まれ，地域社会での自立を保障する地域環境作りの重要性を聞き取ることができた。

（２）2009 年はこの結果をもとに全施設へのアンケート調査内容を吟味し実施した。2009 年度内にその結果を速報版として各施設へお返しすることができた。インタビュー同様に，そこには，生活を支援する，あるいは生活を共にする職員の覚悟が読み取れた。

また，児童自立支援施設が，過去の教護院時代とは質の違う児童を多く受け入れ，変容を迫られていることが窺われる一方で，児童自立支援施設が持つ，集団の力を存分に利用して，自立支援をしていくという基本を維持して行きたいという意思も強く感じ取れた。

そのうえで，改めて強調されたのが，社会的養護にある子ども達と育てる職員との生活空間における関係性の構築の重要性であると思われた。

（３）2010 年は，これまでの調査施設が夫婦小舎性の箇所であったため，交代制の施設への聞き取りを改めて行うとともに，これまでの成果を発表するため，関西（於，京都の花園大学）と関東（於，埼玉の武蔵野学園）の２カ所でフォーラムを開催した。その意図は，外からの意見や考えを取り組み，相互交流を図りながら最終的な研究結果につなげていこうと考えたからである。両フォーラムともに児童自立支援施設に長年勤めておられた先生に基調講演をお願いし，その後，研究員の研究報告，シンポジウムという企画で実施した。関東，関西の 2 箇所で報告会を行った。それを今回とりまとめ報告書として、関連施設等へ配布した。

（４）2011 年は，これまで実施してきた職員へのインタビューと参与観察，さらにアンケート調査から，施設のあるべき姿，子どもたちの抱えている課題，生活を支える保護因子などについての検討を研究者全員で思索，議論を繰り返し「児童自立支援施設で生活するということ」について考えをまとめた。

日本学術振興会へ提出した時の『研究の目的』が幸い研究意義が認められ上記の研究目的 A~D の構想を立てようと思っていたのだが，最終的な見解は報告書に記したとおり，当初の目的から大きく舵を切り替えることになった。その一部を報告書から抜粋しておく。

研究を進めていくなかで「直接職員の方々から話しを伺うことで，私たちは，施設は人の力により成り立ち，子どもたちは，その施設と職員から生きる力を吸収しようとしていると理解するようになりました。職員の実践は，『ちゃんとして生活の規範，モデルを示すこと』に心を砕くことでした。いくら職員でも大人でも『当初は経験していないことのわからなさに戸惑いながら，安易にわからないとも，わかるともいえないという目線でただただその子に向き合っていた』という職員の語りに私は，当初の動機がいかに不適切であったかと反省しました。

いくつかの施設で，数名の職員から話しを聞いていく中で，『包括的な支援プログラムの構築』という当初の計画が，なんと無謀で，なんとおこがましい考えであったかに，とても恥ずかしい思いのなかで私は気づかされたのです。

当初掲げた包括的プログラムとか，支援プログラムは，こうした血の通った暖かい，それでいて、厳しい生活のありようとは対極にあるように思いました。

そこで，私たちの研究は大きな軌道修正を余儀なくされたのです。

この最終報告は，そうした私たちのゆらぎと，職員とそこに棲む子どもたちへの敬意を正直に記したものです。」と記した。

われわれの途上の結論は，これも報告書に記した一部を抜粋すると「児童自立支援施設というあまり広く世間に知られていない社会的養護の生活空間がある。もっと広く知られているのが，養護施設であろう。児童自立支援施設とは，かつて感化法の下においては「感化院」，少年教護法の下で「少年教護院」，現行の児童福祉法の下で「教護院」と呼ばれ，1998 年 4 月にこの名称となったものである。

どういうところかというと，不良行為をなし，又はなすおそれのある児童及び家庭環境その他環境上の理由により生活指導等を要する児童を入所させ，又は 保護者の下から通わせて，個々の児童の状況に応じて必要な指導を行い，その自立を支援し，あわせて退所した者について相談その他の援助を行うことを目的とする施設である。

近年，児童自立支援施設の状況では，入所している子どもの長期的減少傾向が続く中，一方では，虐待を受けた経験や発達障害等を有する子どもの割合が増加する傾向にあり，また，寮舎の運営形態においては多数を占めていた伝統的な小舎夫婦制が減少し，交替制へシフトする施設が増えるなど，施設の様相が大きく変化しつつある。

その一方で，少年法及び少年院法の改正の動きのなか，従来，１４歳未満の触法少年等については児童自立支援施設等の児童福祉領域が対応してきたものを，少年院における処遇が求められるなど，児童自立支援施設は，改めてその存在意義が問われてきている。国は，子どもの健全な発達・成長のための最善の利益の確保を目指し，取り組むべき課題について着実に一つ一つ解決し，具体的な成果を上げることを求めている。しかし，われわれは，まずこの現状を認識することから始めるべきであろうとも考えている。

つまり，児童自立支援施設で生活する子ども達，それを見守り，育む職員との関係性を改めて問い直すことで，子ども達の健全な発達，成長を考えることにしたい。
」ということである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 21 件）

① 田中康雄、発達障害　―生活障害の視点から―,児童青年精神医学とその近接領域,52,3,2011,p289-294,日本児童青年精神医学会，査読なし

② 田中康雄、情緒障害児短期治療施設の可能性―発達障害と生活の視点から―,心理治療と治療教育　―全国情緒障害児短期治療施設研究紀要―,22,2011,p29-33,全国情緒障害児短期治療施設協議会，査読なし

③ 田中康雄、発達障害を生活から考える～児童自立支援施設で生活する子どもたちについて,全国児童自立支援施設協議会,217,p137-156,2011,全国児童自立支援施設協議会,査読なし

④ 村瀬嘉代子、「社会からの臨床心理学の期待」臨床心理学、査読なし、11巻1号、2011

⑤ 高橋一正、「虐待を受けてきた入居者への自立援助ホームでの支援について」、臨床心理学　（金剛出版）11-5、2011、665-670

⑥ 田中康雄、発達障害が示す特性を日常生活で活用すること,子どもと福祉,3,1,2010,p92-101,明石書店，査読なし

⑦ 田中康雄、「社会的養護」に携わる職員の使命,月刊福祉,93,8,p36-39,全国社会福祉協議会，2010、査読なし

⑧ 村瀬嘉代子、「病む子どもの思い、親の思い」、育ちの科学、査読なし、15号、2010

⑨ 高橋一正、「生活を支えるということ」、臨床心理学　増刊第２号（金剛出版），2010、164-169

⑩ 橋本和明，非行に対応するための親子面接，臨床心理学「親子面接の支援計画と実践的アプローチ」（金剛出版刊行），査読無，第10巻第6号，2010,p 866-870.

⑪ 橋本和明，司法領域における面接，こころの科学（「臨床における面接」村瀬嘉代子・青木省三編）査読無，149,2010,p 53-57

⑫ N,Matsuura.,T,Hashimoto/, M,Toichi The characteristics of AD/HD symptoms, self-esteem, and aggression among serious juvenile offenders in Japan、Research in Developmental Disabilities 2010 30: 1197-1203

⑬ 松嶋秀明.学校でコラボレーションの視点をいかす--大人の問題としての子どもの問題. 臨床心理学,10(4),530-534.（査読無し）2010.

⑭ 村瀬嘉代子、「子どもと事実を分かちあうことと生きること」、臨床心理学、査読なし、2009

⑮ N,Matsuura.,T,Hashimoto/, M,Toichi、The relationship between self-esteem and developmental difficulties in male inmates of correctional facility in Japan.、Research in Developmental Disabilities. 2009. 30, 884-890.

⑯ N,Matsuura.,T,Hashimoto/, M,Toichi、A Structural Model of Causal Influence between Aggression and Psychological traits: Survey of Female Correctional Facility in Japan.、Children and Youth Services Review. 2009. 31, 577-583.
⑰ 田中康雄、発達障害と虐待、そして加害行為について,法と心理,7,1,P23-35,法と心理学会, 2008、査読なし
⑱ 田中康雄、児童精神科臨床と成人期臨床を繋ぐために,臨床精神医学,37,12,P1581-1586,アークメディア, 2008、査読なし
⑲ 村瀬嘉代子、「コラボレーションとしての心理的援助」、臨床心理学、査読なし、8巻2号、2008
⑳ 橋本和明, 加害者の被害者性, 現代のエスプリ「加害者臨床の問題と困難性」(至文堂発行) 査読無, 第490巻, 2008,p56-63.
㉑ 松嶋秀明. 境界線上で生じる実践としての協働ーー学校臨床への対話的アプローチ. 質的心理学研究,7, 169-185. 2008.

〔学会発表〕(計13件)
① 川俣智路・松嶋秀明.　行のある子どもの「生活」はどのように支えられているか(1):児童自立支援施設職員の発達障害・被虐待児への対応に関する自由記述式質問紙調査から.2012年3月10日. 名古屋大学
② 松嶋秀明・川俣智路　非行のある子どもの「生活」はどのように支えられているか(2):児童自立支援施設職員の発達障害・被虐待児への対応に関するインタビュー調査から. 2012年3月10日 名古屋大学
③ 橋本和明, 発達障害が疑われる非行少年へのかかわりについての分析ー児童自立支援施設職員へのインタビュー調査からー, 日本心理臨床学会第30回秋季大会基礎。調査発表, 2011年, 福岡国際会議場
④ 松嶋秀明.非行のある子どもの「集団」はどのように見たてられるか--児童自立支援施設職員の発達障害・被虐待生徒についての語りから.家族研究・家族療法学会第28 回大会 2011年6月4日. グランシップ静岡
⑤ Matsushima,H. Bridging the boundary in addressing delinquent students: insider narratives of school-police collaboration.Third ISCAR conference. 8,September,2011. Rome, Italy
⑥ 橋本和明, 包括的虐待という視点からみた虐待の深刻化する要因分析―事例のメタ分析を用いた虐待の共通カテゴリーの抽出, 日本心理臨床学会第29回秋季大会基礎・調査発表, 2010年, 東北大学
⑦ 松嶋秀明.(2010). 学校と警察がつながることで少年に何がもたらされるのか- 教員、補導職員への連携についてのインタビューから . 日本発達心理学会第22回大会. 2010年3月25日. 東京学芸大学
⑧ 松嶋秀明. (2010). 非行のある少年をいかに抱えるか 学校と警察との連携についてのインタビュー調査から 第52回日本教育心理学会総会 2010年8月28日早稲田大学 (口頭発表)
⑨ 千原美重子・今井たよか・生天目聖子・田中泉・松嶋秀明・野田正人 (2010). 保護者支援員の学校コミュニティへの支援と展開のプロセスについて. 日本心理臨床学会第29回秋季大会 9月3日 東北大学 (指定討論者)
⑩ 安田裕子・谷村ひとみ・森直久・香川秀太・松嶋秀明・川野健司 (2009). TEMによる質的研究の可能性の拡大 ―TEMによってどのような地平が開けるか. 日本心理学会第73回大会,京都:立命館大学 (指定討論者) 2009年8月26日
⑪ 松嶋秀明. (2009). いかに「うまくいかない」校内連携は維持されるか―学校心理臨床場面の分析から― 日本心理学会第73回大会,京都:立命館大学 2009年8月27日
⑫ Matsushima,H. (2008). Dialogic construction of Collaborative culture. in school. 2nd ISCAR Congress UCSD, USA. (査読有り) 9月11日
⑬ 千原美重子・生田目聖子・田中泉・山田祥子・粟谷初子・鈴木葉子・松嶋秀明 (2008). 学校臨床心理士に求められる地域臨床の視点ー特に多様な危機介入における社会的支援のあり方を考える (指定討論) 日本心理臨床学会第27回大会. つくば国際会議場　9月4日

〔図書〕(計10件)
①田中康雄、日本評論社、発達支援のむこうとこちら (こころの科学叢書)、2011、241
②橋本和明　金剛出版, 非行臨床の技術―実践としての面接・ケース理解・報告, 2011,261
③松嶋秀明.「学校不適応」の生徒は「障害／病気」なのか？. 大久保智生・牧郁子 (編著) 『実践をふりかえるための教育心理学』 ナカニシヤ出版 (pp159-170) 総頁数227頁 2011
④松嶋秀明. ズレを通してお互いを知りあう実践: 学校臨床のディスコミュニケーション分析. 山本登志哉・高木光太郎 (編著) 「ディスコミュニケーションの心理学：ズレを生きる私たち」東京大学出版会. (Pp71-90)総頁数277頁 2011.
⑤田中康雄、金剛出版、つなげよう―発達障害のある子どもたちとともに私たちができ

ること、2010、261
⑥村瀬嘉代子、金剛出版、新訂増補 子どもと大人の心の架け橋、2010、300
⑦橋本和明編著，創元社，思春期を生きる発達障害－こころを受けとるための技法，2010,180
⑥田中康雄、慶應義塾大学出版会、支援から共生への道□発達障害の臨床から日常の連携へ、2009、244
⑦村瀬嘉代子、金剛出版、心理療法と生活事象、2009、207
⑧橋本和明編著，明石書店，発達障害と思春期・青年期　生きにくさへの理解と支援，2009,310
⑨津崎哲郎，橋本和明編著，ミネルヴァ書房，児童虐待はいま－連携システムの構築に向けて－，2008,220
⑩松嶋秀明.非行少年とその更生．宮川充司・津村俊充・中西由里・大野木裕明（編）『スクールカウンセリングと発達支援』ナカニシヤ出版 pp161-172．2008.

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

６．研究組織

(1)研究代表者

田中　康雄（TANAKA YAUSO）

北海道大学・大学院教育学研究院・教授

研究者番号：20171803

(2)研究分担者

村瀬　嘉代子（MURASE KAYOKO）

北翔大学・人間福祉学研究科・教授

研究者番号：70174290

橋本　和明（HASHIMOTO KAZUAKI）

花園大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：80434687

松浦　直己（MATUURA NAOMI）

東京福祉大学・大学院・教育学部・教授

研究者番号：20452518

松嶋　秀明(MATUSHIMA HIDEAKI)

滋賀県立大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：0036961

久蔵　孝幸（HISAKURA TAKAYUKI）

北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター学外研究員

研究者番号：00451443

(3)連携研究者

富田　拓

国立武蔵野学院

研究者番号：80521794

金井　優美子（KANAI YUMIKO）

北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター学外研究員

研究者番号：90451442

伊藤　真理(ITOU MARI)

北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター学外研究員

研究者番号：80545187

内田　雅志（UTIDA MASASI）

北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター学外研究員

研究者番号：90389643

飯田　昭人(IIDA AKIHITO)

北翔大学・人間福祉学研究科・講師

研究者番号：60453289

(4)研究協力者

荒井　紫織（花園大学　心理カウンセラー）

石倉　陽子（大正大学　カウンセリング研究所）

金澤　多希子（北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター　研究支援員）

川俣　智路（北海道大学）

新川　貴紀(北翔大学)

高橋　一正（自立援助ホーム　ふくろうの家ホーム長）

福間　麻紀（北海道医療大学）

美馬　正和（北海道大学）